

幼稚園より

卒園礼拝

3/8木 12:50～
お話 伊藤 信
(大学宗教部長・教育人間科学部教授)

終業礼拝

3/14水 9:40～

卒園式

3/15木 10:00～

始業礼拝

4/6金 9:40～

入園式

4/11水 10:00～

イースター礼拝

4/13金 9:40～

母の日礼拝

5/11金 9:40～

初等部より

初等部チャペルコンサート

3/1木 15:40～16:30
初等部米山記念礼拝堂
ハンドベルワイア 聖歌隊、トランペット隊

卒業礼拝(6年生のみ)

3/12月 9:10～9:40
初等部米山記念礼拝堂
説教 小澤 淳一(宗教主任)

6年生を送る礼拝

3/16金 8:25～8:50
初等部米山記念礼拝堂
奨励 馬越 嶺(教諭)

フィリピン訪問プログラム

3/21水-27火

イースター特別祈禱会

4/9-13金 8:00～8:15

初等部米山記念礼拝堂

イースター礼拝

4/10火 8:25～8:50
初等部米山記念礼拝堂

お母さんへの感謝の集い

5/15火 11:00～12:00

青山学院講堂

中等部より

卒業礼拝

3/14水 青山学院講堂
講師 笹森 建美
(日本基督教団駒場エデン教会牧師)

フィリピン訪問プログラム

3/21水-27火

CF(クリスチャンフェロシッ)活動

4/6金 校内清掃奉仕活動

春の教職員修養会

4/7土 13:30～15:00

講師 平塚 敬
(立教女学院理事長、中学校・高等学校校長)

新人生オリエンテーションキャンプ

4/11水-13金

イースター礼拝

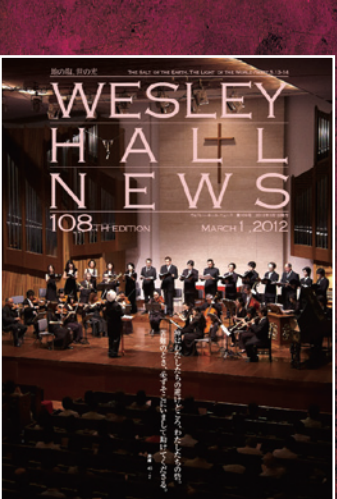
4/24火 9:20～10:30

青山学院講堂

母の日・家族への感謝の日礼拝

5/15火 10:20～12:00

講師 梶井 和馬(専員牧師、
恵泉女学園大学客員教授)



表紙写真 バッパ・コレギウム・ジャバン
レバネー・コンサート
2011年6月16日
於カウチャー記念礼拝堂

希望と願いと、感謝をもって

東日本大震災から一年

高橋 南子

女子短期大学 子ども学科1年

3月11日の東日本大震災、忘れもしないあの日、高校を卒業したばかりだった私は地元宮城県気仙沼市で被災した。地震直後は携帯電話も通じなくなったため、家族の安否もわからないままの避難だった。その夜は雪が降り、避難先の高校の体育館では校舎じゅうのカーテンを剥がし、足りない分は新聞紙で補い、暖をとった。何も持たずに逃げてきた人が殆どで、皆空腹だったが、津波の被害を受けなかったスーパーが差し入れてくれた食糧は、惣菜のパックが約40個。その場にいた避難者は約800人。1つの惣菜パックを10人で分けて食べた。生徒や若者、教師は食べずに、負傷者の手当てや避難者の対応に走り回った。翌日、私を探しに来た母と妹の姿を見て家族の無事を知った時は、涙が出た。「ああ、神様が守ってくだった」。心の底から感謝したのを覚えている。

しかし、その後の生活は、そのような感謝も忘れてしまうほどの厳しい暮らしだった。食糧をもらうためだけに並び続け、知り合いの無事を願い、心をすり減らす日々の中で、「どうして、私たちだけ」と、現実を恨んだ。毎日、泥と重油の悪臭の中で、自分の歩いている瓦礫の下にまだ人が埋まっているのではないかと怯えた。震災前の、友人と会話し、好きな本や音楽に触れ、笑い、泣き、愛し、神様と沢山の人々に守られた日常が恋しかった。被災してからの毎日は、ただ生きるためだけに時間を費やすような日々だった。

あれから、もうすぐ1年が経とうとしている。被災から9ヶ月経って帰省したときの気仙沼は、夏休みに帰省したときにはまだあった瓦礫の山がほとんど片付き、地盤が沈下した

ため水浸しで使えなかった道路もかさ上げされ、交通の便には困らない程にまで復旧していた。また、流出した営業所や商店街も、仮設店舗や「復興屋台村」と呼ばれる仮の商店街が町のあちこちに設置され、漁業も少しずつ再開し、被災地は徐々にではあるが、復旧し始めている様であった。

しかし、そのように各種産業が復旧してきている一方で、被災地ではもうことが当たり前になり、物が売れず経済が上手く回復していかないことが、現在問題になっている。被災者は職や将来に見通しが立たないため、節約・貯金を中心に行動してしまうのだ。経済回復の長期化は、復興の長期化につながる。更に、復興の長期化は人口流出をまねく。地方都市にとって人口流出は町の消滅につながる、命取りな問題なのだ。

現在、被災地は国の方針が決まらないために、復旧にかかる予算や土地の利用方法が決まらず、復旧が進まない状態にある。津波の被害を受けた多くの地はリアス式海岸のため、平らな土地が少ない。しかも、地震によって地盤が75センチも沈下したため、多くの土地が海水に浸かったままであり、復旧を進めようにも、店も家も、何も建てることができない。「土地をかさ上げる」とは言っても、ただアスファルトでかさ上げすればいいわけではない。地下にある下水道やマンホールなど、すべて整備しなければいけないのだ。この土地の問題の解決は、非常に時間のかかることであり、少しでも早く進めるべきことなのである。

このように、震災当時と現在では、必要とされているもの



左:復興屋台村
右:復興商店街
流出した商店街の仮設店舗、仮設住宅と同じ素材のプレハブ商店街であり、店内環境などの問題は山積みである。

シリーズ 地の塩、世の光

file 12

◎ 各界で活躍するクリスチャン

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやとされた。

ch.53:5 Isaiah
イザヤ書 第53章5節



奥田 知志

日本バプテスト連盟 東八幡キリスト教会 牧師
NPO法人 北九州ホームレス支援機構 理事長

絆は、傷を含む ——絆の手段化に抗して

震災後、結婚相談所が盛況だと聞く。「将来への不安が膨らみ、家族を作ることの大切さを痛感した」らしい。(2011年5月15日朝日新聞)。人はひとりでは生きていけない、だから結婚相談所の一件は、いわば「当然」なのかも知れない。

ある方がこんなことをおっしゃっていたことを思い出す。団塊世代の会社経営者。お金には不自由はない。日ごろ「自己責任」を強調し「過労死は自己管理の問題」と言いのけるような方なのだが、最近趣味のサークルに通っているという。その方曰く「老後、ひとりで生きていくのはつらい」。強気の発言を繰り返すこの方とて「人はひとりでは生きていけない」という現実を認め、何とか「絆」を結ぼうとしている。一見「なるほど」と、うなづく場面なのだが、「私にとってサークルに参加することは、老後に対するリスクヘッジ(危機回避)

よ」とその方が仰るのを聞いて「そうかな?」と思うのだ。

「絆」とは何か。確かに人は、ひとりでは生きていけない。だから「自分が安心・安全に生きるために絆が必要だ」と考える。でも、それは本当の「絆」なのだろうか。そこにおける出会い、相手、「絆」は、結局のところ自分が生き延びるための「手段」に過ぎないのではないかと。絆の手段化に違和感を覚えるのは私だけだろうか。

結婚相談所の盛況も、サークル活動も、リスクヘッジとしての「絆」を求めている行動だとすると、そこで見出した「絆」は、いずれ破たんすることになる。なぜなら、そこには人と人の人格的な出会いがないからだ。「絆」は、本来「私とあなた」という人格の関係において成立するもので、「私とあなた」という関係が前提。それは「人格をもった生身の人」との出会いなのだ。それは、自分の都合、すなわちリスクヘッジの道具ではない。しかし、「リスクヘッジのために」と「私とあなたの関係」を「私とそれの関係」、つまり「モノとの関係」に置き換えた時、人は相手を「目的達成の手段」として利用しはじめるのだ。さらに、いくら「リスクヘッジ(危機回避)のため」と言っても、残念ながら私たちが人格関係としての「絆」を結べば、必ず新たな「リスク」を負うことになる。なぜなら「絆」には「傷」が含まれるからだ。「絆」は自己保存的なリスクヘッジにはとどまらない。

聖書は、神が人間と絆を結んだことを証言する。この絆が、イエス・キリストの十字架であった。罪人たる人間と絆を結んだ神のひとり子は十字架に傷ついた。そして、その打たれた傷によって私達は癒されたのだ。そして、その神との絆に生きると決めた(信じた)人もまた、キリストへの服従故に苦しみ、苦難を賜る道へと歩み出す。絆とは、そういうものではないかと思う。



かさ上げされた道路と、港付近の街の様子(宮城県気仙沼市)
地盤沈下したため、依然として土地が海水に浸ったままであり、使用不可能な残置建造物の解体もままならない。



も大きく変化した。被災当時が必要とされていたものは、物資などの「一時的な支援」であった。しかし今、被災地のために本当に必要とされているのは、一時的なものではなく、「普通に戻るための取り組み」なのだ。本当に被災地が復旧するためには、継続的な取り組みが必要なのである。一時的に、何でもやってあげることがいいわけではないのだ。

土地の復旧などの基本的なことが決まらず、時間がかかる。しかし地方都市のため人口流出の問題や、市民が食べていくための職の問題も抱えている。だが、ただ義捐金や支援物資を継続するだけでは、市民はそれに甘え続けてしまう。より安全に街を元に戻していく一方で、元々あった街の課題も改善していきたい。しかし、復旧さえままならない。

現在、被災地はそういう葛藤の中にいる。色々な要素が複雑に絡まりあった中で、復旧・復興に向けて、推進者は、被災者は動いているのだ。国は本当に被災地の現状をわかっているのか、わかっているとしても、迅速に行動しているのか、私には見当もつかない。だが、多くの人々が被災地の現状を知り、忘れずに訴え続けることが、今後大切なのではないかと思う。被災地では復興推進者も、皆同じ被災

シリーズ・私の教会

file 61

The United Church of Christ in Japan -- Koganeimidoricho Church

日本基督教団 小金井緑町教会

山畑 謙

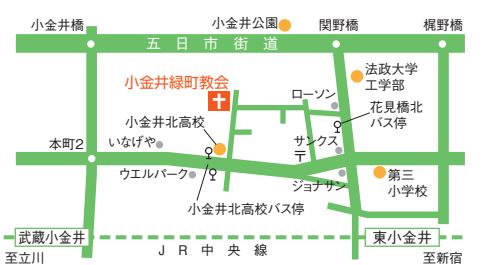
高等部聖書科講師

小金井緑町教会は1965年、富士見町教会の関係教会として創設されました。米国改革派宣教師ブラウン、米国オランダ改革派宣教師ババに師事し薫陶を受けた植村正久牧師によって1887年に創設された富士見町教会(千代田区)は、多くの教会を生み出してきました。その一つとして、1965年、富士見町教会の副牧師であった山本圭一牧師と同教会の信徒9名が中心となり、「小金井緑町伝道所」が創設され、同年12月25日クリスマスに第1回の礼拝が行なわれ開拓伝道がスタートしました。1966年3月正式に「日本基督教団 小金井緑町伝道所」となり、1967年「日本基督教団 小金井緑町教会」となりました。

1968年、現教会敷地を所有していた信徒から土地の寄贈を受け、

1970年、現会堂が竣工しました。会堂は、東京工業大学名誉教授・谷口汎邦博士の設計による大きな屋根を持つ平屋建てで、建築面積231㎡(70坪)の和風の建物です。小金井緑町教会の伝道や働きが、日本の伝統や文化から遊離することなく、伝統的な文化との調和をもって豊かに展開されていくことを願う祈りが形となっています。

礼拝堂内の両側面は床から天上まで一面の障子となっており、やわらかな薄明かりが会堂を満たします。静謐という言葉が似合う和風の会堂で、正面の壁には和紙が格子模様貼られています。障子の格子模様をはじめとして、よく見ると、そこここに十字架がひそやかにあらわされているのです。また大きな屋根は、親鳥が雛をその翼の下にかばいつ守るのようにも見えます。「神は羽をもってあなたを覆い、翼の下にかばってください。神のまことは大盾、小盾。」(詩編91:4)、「神よ、慈しみはかにか



JR中央線東小金井駅北出口より徒歩約17分(1.3km)。
●武蔵小金井駅北口または東小金井駅から京王バス、「小金井北高校」で下車。
●東小金井駅よりCoCo's(小金井市町)、「花見橋北」で下車。
〒184-0003 東京都小金井市緑町4-16-33
電話&Fax : 042-381-7961
ホームページ : www.km-ch.org E-Mail : mail@km-ch.org

WESLEY HALL NEWS

108TH EDITION MARCH 1, 2012
ウェスレー・ホールニュース 第108号 2012年3月1日発行



神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。
結集 46 2

CHRISTIAN BOOKS & CDs

シリーズ・キリスト教関連メディア紹介

シェール・シルヴァスタイン(作・絵) ほんだ きんいちろう(訳)

『おおきな木』

The Giving Tree

篠崎書林 1976年

水野 友美子

女子短期大学 シオン寮 副寮監

今回ご紹介する「おおきな木」は、大学時代、クリスチャンの友人が誕生日に贈ってくれたものでした。近年、新訳が出版されたので、書店などで見かけたことのある方も多くかもしれません。子ども向けの絵本ようですが、どんな年代の方にもおすすめしたいと思います。私は初めて読んだとき、切ない気持ちとともに、「いったいこの物語をどう受けとめるのか」と自分が問われ、試されているような気がしました。そして、この本を選んだくれた友人が、なにか私には理解できない、彼女の大切にしているものを伝えようとしている、そんな気がしてなりません。そして、ちびっこに与える木の姿は、この物語の一貫したテーマを伝えているようです。ちびっこは、りんごの木が大好きで、りんごの木もちびっこが大好き。幼いちびっこは、



木と毎日遊んでいましたが、大人になるにつれ、木に会いに来なくなってしまいました。しかしある日、若者となったちびっこが、木のもとに現れ、おなかがいまい、おこづかいをくれな、と訴えます。木は困りますが、わたしのりんごの実を町で売ればいい、と提案すると、若者はその実をすべてもぎとって行きます。そして、「それで木はうれしかった」。物語はそう伝えます。家庭を築きたい、豊かな暮らしがしたい、遠くに行きたい…彼心のを占める願望をかかえてやろうと、木はさらに、枝を与え、幹も与え、とうとう小さな切り株になってしまいます。それから年月が経ち、古い切り株となった木のもとに老人がやってきます。木は、年老いた彼を「ぼやう」と呼んで優しく迎えます。男がどのような日々を過ごしてきたのかは語られませんが、その旅路は決して楽なもの

ではなかったことでしょう。彼は、ひとりぼっちで、疲れたその体と心だけで帰ってきたのです。そして、もはや欲しいものなどない、静かに休む場所がありさえすればと言ったのでした。「おおきな木」と出会ってから、私はやがて教会に通うようになり、神さまがいっしょなこと、私たちの存在を愛されていることを知りました。そして、あらためてこの本を読み返したとき、ああ!と思いました。ぼやうのためにその身を削るようになって自分自身を与え、小さくなった木は、神さまの姿は、聖書が教えてくれる、儼然と深い神さまを思わせました。また、最後の老人と木の姿に、ちびっこが、魂の安らぐ居場所にやっと辿り着いたように感じました。そしてそのとき、友人がこの本をとおして伝えようとしてくれたプレゼントを受けとめたいように思いました。

編集後記

神様がずっと共にいて下さることが皆様の寄稿からうかがえ、この恵み深い天のお父様の存在と愛を感じる事が出来ました。何も心配せず、ただひたすら神様を信じ、心配事なくても、すべて力になって下さる神様にゆだねられる毎日をご過ごせる幸に感謝しつつ、この幸を他の人たちに伝えられるように祈っております。この春に集まっていた若者たちの幸せを心から願ってやみません。

大学 社会情報学部教授 村川久子

Wesley Hall News 第108号

2012年3月1日発行

発行 青山学院宗教センター 学院宗教部長 嶋田順好
東京都渋谷区渋谷4-4-25
TEL 03-3409-6537(ダイヤルイン)
URL http://www.aoyamagaakuin.jp/center/index.html
E-mail agcac@aoyamagaakuin.jp
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会
印刷 株式会社 万全社

高等部より

卒業礼拝
3/8 木 9:15 青山学院講堂
説教 嶋田 順好 (学院宗教部長)
卒業式
3/10 土 9:30 青山学院講堂
入学式
4/7 土 10:30 高等部PS講堂
イースター礼拝
4/11 水 高等部PS講堂
説教 増田 将平 (青山教会牧師)
(宗教主任 相良 昌彦)

女子短大より

卒業礼拝
3/21 水 13:30~14:30 青山学院講堂
説教 シェロ マイク (学院宣教師)
**キリスト教学校教育同盟校
推薦入学生他歓迎会**
4/3 火 女子短期大学礼拝堂 他
始業礼拝
4/4 水 10:00~11:00 青山学院講堂
説教 吉岡 康子 (宗教主任)
イースター礼拝
4/4 水 12:35~13:05 女子短期大学礼拝堂
宗教活動委員会歓迎会
4/13 金 女子短期大学礼拝堂 他
チャペルウィーク
5/14 日 18:00~19:00 青山学院講堂
ペンテコステ礼拝
5/28 月 12:35~13:05 女子短期大学礼拝堂
(短大宗教活動センター)

大学より

**オーストラリア・
クリスチャンファミリー・
ホームステイ・プログラム**
2/10 金 3/13 土
大学宗教委員研修会 (公開講演会)
3/1 木 10:00~15:30 第19会議室 (青山)
B738会議室—テレビ会議システム (相模原)
[大学生のメンタルヘルスケアについて
—教員としてどう関わるか?]
講師 白井 幸子
(ルーテル学院大学教授 臨床心理学)
フィリピン訪問プログラム
3/14 水 23 金
ワークキャンプ in フィリピン
3/14 水 28 水
卒業礼拝
3/24 土 9:00~ ガウチャー記念礼拝堂
**キリスト教推薦入学生
オリエンテーション**
4/2 月 9:00~ ガウチャー記念礼拝堂 他
**キリスト教雑論 I
オリエンテーション**
4/3 火 5 木 ウェスレー・チャペル
新入生歓迎礼拝
相模原 4/9 日 14 土
ウェスレー・チャペル
チャペル・ウィーク
青山 5/21 月 25 金
相模原 5/21 月 26 土
**宗教センター・
クルール・
活動**
いずれの集会も自由に参加できます。
(対象:本学大学生)
聖書に親しむ会
わかやすす、楽しく聖書が学べます。
(宗教主任担当)
キリスト教文化に親しむ会
文学、自然科学、社会問題、音楽
などをキリスト教信仰との関わり
において語り合い、考え合います。
(宗教委員、クリスチャン教員と
宗教主任担当)
(宗教センター事務局 平野修一)

本部より

教職員新学年度礼拝
4/6 金 17:00 ~ ガウチャー記念礼拝堂
(宗教センター事務局 平野修一)

歩む二人の弟子、それは私たちの姿でもあります。
——夢が破れた、失敗した、生きる意味が分らない、先が見えない、祈る気すらしない——。そんな時、イエスが傍に来て、一緒に歩みながら、「どうしたの?」と訊ね、「話してごらん」と勧めてくださいます。何もかも御存知なのに、悩みや迷い、失望など何でもありのままを話してごらんと言ってくださいます。イエスの復活、それはイエスが今も生きておられるという事実です。生けるイエス・キリストが、私たちと一緒に歩むことを選んでくださり、何でも聞いてくださると信じて生きるのが復活信仰と言えるかもしれません。神は聖霊により、言葉(聖書)と行為(聖餐)を通して、復活のイエスを分らせてくださいます。復活のイエスと出会う鍵は何でしょう。それは、自分の心の動きに正直であることではないでしょうか。普段、私たちは理性や知性主導で生きています。「心が燃えて」いても、理性的・知性的であろうとして、その火を消してしまっているのかもしれません。人は、常に一緒にいてくれ、どこまでも話を聞いてくれる誰かを見つけた時、心が燃えるのではないのでしょうか。それが復活のイエスだと言えるのです。話し、聞いてもらい、御言葉に耳を傾け、食し、黙し、従う—— こうした日常の営みの中で主にお会いできるのです。なぜなら、主は復活されて今、生きておられるからです。

御自身からも聞いていたことでしょう。そして、ここでも一度、でも、分っていないのです。一行は目指す村に近づきますが、なおも先へ行こうとされるイエスを二人は無理に引き止めます。もし、そうなったのなら、復活のイエスを知る機会は失われていたかもしれません。「イエスを引き止めさせた」何かが二人の心の中にあったのです。イエスの声、姿、その言葉、人柄…。「心は燃えていたではないか」(32節)と二人が振り返った道中での事実でした。引き止められたイエスは、食事の席でパンを取り、それを裂いて渡します。すると、二人の目が開け、イエスだと分ったのです。その瞬間、イエスの姿は見えなくなりました。二人は、時を移さず出発して、エルサレムに戻って行きました。そこで待っているのは、仲間の弟子たちだけではあります。イエスを殺した人たち、キリスト者を迫害しようとする者たちもいました。それにもかかわらず、二人は戻りました。戻らずにはいられなかったのです。復活の主にお会いした。それを語らずにはいられなかったのです。二人は、心を強くしようとしたのでも、勇気を振り絞ったのでもないです。復活のイエスとの出会いが、恐れを吞み込んだのです。

見えないものを見る目
語り合うほどに心沈み、エマオへの道をうなだれて

その話は何のことですか」(17節)と尋ねます。すべてご存知なはずです。それにもかかわらず、イエスは二人の弟子の失望・落胆・不安などを直接、本人たちの口から聞きたかったのでしょう。弟子たちは、相手が誰だか知らないまま、しかし、溜まっていたうっぶんを晴らさんとはかり「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけではご存じなかったのですか。」(18節)と、復活のイエスに向かって一連の出来事を堰を切ったように捲し立てます。——イエスが偉大な預言者で、イスラエル解放の期待を一身に背負っていたこと。しかし、十字架刑に処せられてしまい、3日目に婦人たちが墓に行くと、遺体なかったこと。天使たちが「イエスは生きておられる」と言うので、仲間の者が墓に行ってみたが、確かに墓は空だったこと——を。

開かれた弟子たちの目
「そこで、イエスは言われ」(25節)ます。「ああ、物分が悪い、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」(25-26節)と。そして、聖書全体にわたり、御自身について書かれていたことを説明されました。一体彼らは何度聞いていたのでしょうか。モーセを通して、預言者たちを通して、イエス

いろいろな事があった学園生活も、残りわずか。
思い出と、希望——卒業に寄せる思いを、各部の方にききました。

西田 恵一郎
中部部宗教主任

特集 卒業——新しい一歩

歌い続けること
高鳴る期待を胸に、急ぎ歩く幼稚園への朝のみち、ともだちとたくさん遊んだ充実感で、笑顔いっぱいの帰りみち、つないだ手を大きく振りながら、ようじさんびかを歌いました。
お風呂の中で、声をいっばいに張り上げ、回り一面に響かせて、外れた音をこどもに正されながら、こどもさんびかをよく歌いました。
ようじさんびか、こどもさんびかの短いフレーズは、少ない言葉で、少ない言葉ゆえに、広く深い世界観を私たちに示しています。
うみでおよく さかなたち そらであそぶ こりたち わたくしたも かみさまに つくれそだった なかまたち (ようじさんびか 23)
これは、7月のお誕生会で歌われる、私も子どもも大好きなさんびかの一つです。この広い地球上で、さかなもこりも草花も、そして私たちも、まさに生かされているのだ、その奇跡を改めて感じ、自然と感謝の気持ちが湧いてきます。
礼拝は、幼稚園生活で欠くことのできないものですが、3年間の園生活を通じて、親子共々、祈り、日々それを感じることにの本当の大切さを教えていただきました。年少の頃には、手を組み目を閉じるとささ覚束なかった子どもたちも、年長になる頃には、自らの言葉でお祈りが出来るようになりました。
また、都心であることを忘れさせるほどの幼稚園における豊かな自然は、その恵みへの感謝の気持ちを芽生えさせ、皆で収穫の喜びを分かち合いました。
かけがえのない幼少期、青山学院幼稚園での3年間は、祈り、思うことの大切さ、自然の恵みや生かされていることへの感謝の気持ちを、しっかりと子どもたちの心に植え付けてくれたのです。親戚で手をつなぎ、ともに歩んだ23年間…この大切な日々をおとくくださったことに感謝いたします。
あたたかく見守り、支え、導いてくださった先生方、本当にありがとうございました。そして、幼稚園で出会えた全ての皆様に心より感謝申し上げます。
今日も、そしてこれからもっと歌い続けます。
かみさまに かんしゃいましょう
ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ
かみさまは いよちをのくくださった
ハレルヤ ハレルヤ ハレルヤ (こどもさんびか 85)

スタートとゴールは重なる
自分はどんな6年生だろう。卒業を間近にひかえたこの時期、そんなことが頭をよぎる。1年生のパートナーに、優しく出来たか。遊んであげられたか、心配になってくる。ほかの1年生だった頃、パートナーのことは、残念ながら、ぼくの記おくに残っていないし、思い出も浮かんてこない。それは悲しいことのように思う。今の1年生にそういう思いをしてほしくない、1年生との思い出をいっぱい作りたい、いっぱい遊びたい。6年生になったとき、そう思った。今の1年生が6年生になったとき、パートナーにもそうするように。
初等部での6年間は長いようで短かったと思う。毎年毎年ちょっとずつ成長し今の自分になった。1年生では何もかもが初めて。分からないことだらけだけど、6年生や先生に教えてもらい成長できた。2年生では初めての下級生、1年生のパートナーができる。3年生からはクラブが始まり帰るのもおそくなった。6年生になると、最上級生としての責任が生まれる。6年間の集大成として洋上小学校に行き、一つひとつのことが最後になる。
今、6年生全員が卒業というフィニッシュテープに向かって走っている。ゴールまでのきよりは人それぞれだ。もういつまでゴールできる状態の人はいれば、まだまだ先が見えない人もいる。しかし全員に共通して言えることは、最後はそろって卒業式という場で卒業すること、ゴールすること。でもゴールしたから終わり、卒業したら終わりという意味ではないと思う。卒業は、中学生生活へのスタート地点でもある。それはまるで、箱根駅伝みたいだ。第一走者のゴールは第二走者のスタート、往路のゴール地点は復路のスタート地点。小学校の卒業は中学校のスタート、中学校の卒業は高等学校のスタート、高等学校の卒業は大学のスタート、大学の卒業は大人へのスタート…というように、スタートとゴールが重なって成長していく。ほくは、「これでもう終わり!」という地点はないと思う。日々、成長していくんだと思う。身体は成長は止まったとしても、心の中はずっと成長し続けることができるから。
人生の1ページをこの学校で過ごせて、本当に良かった。初等部を卒業するのは悲しいけれど、新しいスタートだと考えればうれしさが胸がふくらんでくる。中部部でまた、新しいスタートを切るのが楽しみだ。
ゴールでフィニッシュテープを持ってほくを待っていてくれた先生、両親、神様に感謝して卒業したい。

中部部と聖歌隊
私にとって、中部部からの卒業は、聖歌隊からの卒業であるとも言えます。
受験前に中部部の学校説明会に参加した時に、講堂に響き渡る聖歌隊の合唱を初めて聴いてとても感動しました。いつか私もあの中まで歌ってみたいと思い、中部部に入學することを強く決意しました。
入学後、幸運にも聖歌隊で歌うことができるようになり、二年間、私は聖歌隊として活動させていただきました。
卒業を前にして、昼の休憩時間や休み期間を返上しての練習が辛かったこと、練習後にただける、のど飴を差し込んでくれるまで歌ったこと、聖歌隊で仲良くなった友人と一緒に思い切り歌ったこと、点火祭の時、きれいなクリスマスツリーの下で大勢の人達の前で歌ったことなど、苦しかったことや楽しかったことが次々と思い出されます。
特に、聖歌隊として最後の奉仕となったクリスマス礼拝は、感慨深いものがありました。
聖歌隊の歌う曲のひとつである「さやかに星は煌めき」の歌詞の一節に、「新しき朝は来たり、榮えある日は昇る」という箇所があります。私は、この歌詞は、どんな困難なことがあっても、いつか必ず良い事は訪れる、という意味であると考えています。この箇所を先生や友人と一緒に覚えて、今まで一緒に頑張ってきた思い出が駆け巡って胸が熱くなり、泣きそうになりました。聖歌隊で歌を歌えて本当に良かったと感じた瞬間でした。
また、中部部入學当初は、慣れない環境に不安ばかりでしたが、聖歌隊やクラスの友人がたくさんできて、毎日をとても楽しく送ることができました。
もう一度中部部で毎日過ごしたいと思えるほど、名残惜しい思いでいっぱいですが、中部部で得た多くの友人や、聖歌隊で得た多くの経験と感動をばねとして、高等部への第一歩を踏み出して行きたいと思います。

未来は長く続く
暦年の初めに年度の終わりが滑り込んだ3学期という時期は、どこか時間が滞留してためたっているような感触がします。"あわいの季節"ともいうべきでしょうか。"C'est le commencement de la fin."これは終わりの始まりだ—ナポレオン時代の終焉を予見した宰相レーランの囁きに倣って、ふとそんな言葉も口をいって出てきます。顧みれば、高等部はひねくれ者の僕にも居場所を与えてくれる懐の深い学校でした。友人たちもみな、のびのび闊達として、互いのテンポを尊重し合える大人ばかりでした。悲嘆に暮れがちな僕を慰め励ましてくれたみなさん、特にHR305の仲間たちと担任の武藤先生、オルガン部に連なるみなさんと顧問の樋口先生には心から感謝しています。
さて、定められた時は満ちて、僕らは卒業を迎えますが、中には寂然としないう面持ちで失意のうちに卒業する人もいます。他人との不毛な比較や不条理な出来事に疲れたり、屈折した感情を持て余したりして、一体あれは何の意味があったのかと、外傷的な体験は、自分の物語の内に眠眠を見出すまでは疼きを止めないでしょう。退屈な日常が醜す倦怠と相俟って、自分があぐねたままの課題は通奏低音のように今後つきまとうのでは、という予感もするものです。でも、「たとえ、遅くなくても、待っておい」(ハバタク書23)。会心の笑みが浮かぶ日が、今まで拘泥してきた視座が変えられる日が、緩やかにあるのは劇的に来る。単調な日々も実は、新たな段階へ着々と昇っていく螺旋階段のようなものかもしれない。その時まで「刃を書き記せ」(同22)。変化は起こる前の静寂のうちにすでに始まっているのだから—と聖書は告げているのではないのでしょうか。
毎年3月になると「去年の今頃はこんな未来が待ち受けていたなんて思いもしなかったなあ」という思いに襲われます。来年もきっとそう、胎動を始めた未来のざわめきに耳を澄ませますように。そしてどうか僕らが、人知を超えた見えざる手の温もりで気づいていきますように。
"L'avenir dure longtemps." (L.Althusser)—未来は長く続くのだから。

地の塩 世の光——という言葉に導かれて
私はこの大学生活を振り返ると、とても幸せな3年間を過ごすことができたと思います。もともと関西出身の私は関西の大学を選ばず、わざわざ遠い東京にある大学を選んだことを周りの人から疑問に思われ、自分自身でも正直「何故この大学を選んだのだろうか?」と考えるほどでした。こんなない加減な私ですが、この大学を選んだきっかけに「地の塩、世の光」という言葉がありました。私は高校もミッション系の学校に通っていたのですが、私の高校のモットーがこの「地の塩、世の光」でした。キリスト教を信仰していたわけでもなく、ただ単に悩みが多かった当時の私にはとても強く心に響いた言葉でした。進路を決める時に、高校と同じモットーの大学があると知り、同じモットーの大学で学びたいと思ったのが一つのきっかけでした。
いざ大学生活が始まると、新しい環境と東京での暮らしなど、不安な気持ちでいっぱいでした。しかし、そんな私を救ってくれたのがシオン寮での暮らしと部活動でした。私は大学生活の3年間、短期大学の寮であるシオン寮で過ごしました。シオン寮での暮らしでは、普通では経験できない貴重な体験を沢山できたと思います。共同生活の楽しさや人間関係、社会の基本的マナーなど、シオン寮では日常生活においてさまざまな学びがありました。
大学生生活の活動の中で、部活動に励んだことも私の貴重な経験です。私は入学後、どのように大学生活を送ろうかと考えていた時、偶然先輩に部活の見学に誘われ、そこでなんとなく入部したのがハンドベルクワイアでした。部活動ではさまざまな行事に参加し、大学の礼拝奉仕やコンサートだけでなく、関東大会や世界大会にも出場できたことは一生の宝物です。
私は自分に自信がなく、自分に何ができるのだろうかとうずうと悩んでいる時もありました。しかし、「地の塩、世の光」という言葉に出会い、「ひとひとどりが必要とされる存在」という言葉を信じて、導かれて来た大学生活はとても素敵な3年間でした。これは充実した授業のさまざまな学びや寮生活、そして部活動など良い環境に恵まれたからだと思います。こうした出会いや環境に感謝して、これからも生きていきたいです。

あなたが私を選んだのではない。私があなたを選んだ。
私は、クリスチャンホームに生まれ、幼い頃から教会の聖歌隊で神様を賛美してきました。高校1年の時、神様の愛に触れる信仰体験を与えられ、親に連れられて教会に行く信仰から、自分の信仰により歩む生活へと変えられました。しかし、高校生活の楽しさの中で、そもそも何故クリスチャンなのか、あの信仰体験は何の為にだったのかを振り返る機会もなく過ごしていました。
大学進学に悩む中で祈っていた時、青山学院にキリスト者推薦の制度があることを知り、祈りつつライしたところ幸いにも総合文化政策学部への入学が許されました。一期生でキリスト者推薦会「エクレシア」を立ち上げ、積極的に活動に参加しました。私の所属教会の聖歌隊では広い世代の方々と共に賛美してきましたが、大学ではキリスト者の友人や先生方と教派を超えて交流し、信仰を高め合うことができました。
大学礼拝のスチューデントワークにおいて証の指名を受けた時は正直不安でした。しかし祈りつつ過去を振り返り、また天に帰っていったばかりの祖父のことを思い返していた時に、自分がなぜ存在し、クリスチャンなのか、なぜ聖歌隊で賛美をお捧げするのかを示され、感動が廻り、そこで教えられた使命について証をしました。これが私の信仰の原点であり、これから歩む人生においても行き詰まり迷ったときに読み返すべきものとなりました。
聖歌隊活動とアルバイト・交友関係などの私生活との両立に苦労したこともありましたが、学業を疎かにしてはならないなと思い勉学に励みました。3年生の春には学業奨励賞を頂き、地道な努力は必ず報われることを体験できたことは大きな喜びです。また総合文化政策学部の講義は大変興味深いもので、様々な角度から文化について学び、世界に視野を広げると共に創造性と感受性を養うことができました。大学生活の中で学んだ多くの事を、社会人として活かしていきたいと思います。
社会に出ると、キリスト者宣言をすることに躊躇してしまうかも知れません。しかし、主の選びに応え、主に従い、そして本学のスクールモットーである「地の塩、世の光」の御言葉のように、私の存在そのものを通してキリストを証する者となりたいと願っています。